上映映画解説

1954, 10.1 ~ .7

国立近代美術館　フィルムライブラリー

NO. 29

月例映寫会について

国立近代美術館のフィルム・ライブラリーでは、内外古今の優秀映画の収集保存とその活用に努めております。今回は「四人の画家」展の期間中、月例映写会として次の短篇映画の最新作を、月・水曜日を除く毎日二時より上映いたします。

芦沼　四巻

製作　山峡視覚教育研究所
企画　野原正
脚本　岡部久
演出　岸田二郎
撮影　伊藤宣二
音楽

新潟県の一部に海面より低い約二万町歩の低湿田があります。この地方は、信濃川と阿賀野川が運んだ土砂によつてできた湿地帯ですが、だんだんに人がはいり開墾されるようになりました。

しかしひどいところでは胸まで水につかる田圃での農業は、普通では考えられないほどの努力が行われ、その上こうした努力にもかかわらず、いつたん天候に異変があると全地帯が水をかぶつて一面の湖となり、思わぬ凶作におそわれて農民に多くの悲劇をもたらしました。他に土地を求めることのできない人びとは、この悪条件とたたかいながら「土取り」などをしながら、食糧を作りだす苦しい努力を続けてきました。

時代のうつりかわりにつれて、この地方の人達は機械を利用して共同の力で土地改良に着手するようになり、はじめは蒸気次いで電力を利用する排水機、それに国営による排水所、県営による排水路などの工事が進められ、長い間の労苦がむくいられて間もなく低湿田も姿を消すことになりました。

この映画は、新潟県農林部農業改良課が県下の低湿田地帯について行つた水利計画のPRのためにつくつた映画ですが、悪条件のもとに努力を続ける農民の労苦を伝え、このような水利事業の必要さを説きながら農民の努力と機械文明の発達が長い間の自然の悪条件にうちかつて明るい生活をもたらして行く過程を刻明に描きだした記録映画として、最近の短篇映画の中での異色ある作品ということができましよう。

御馳走列車　三巻

企画　日本国有鉄道
製作　日映科学映画製作所
脚本　石本統吉
演出　片田計一
撮影　古川良範
　　中村敏郎
　　瀬川順一

「御馳走列車」といつても食堂車のことではありません。私たちの食卓に並ぶいろいろな御馳走を産地から運んで来る列車のことなのです。

この映画は「まぐろ」に例をとつて、北海道沖でとれてから、漁港――貨車積み――青函連絡船――操車場――鮮魚列車――魚市場――小売店と食卓に上るまでの径路を、鉄道輸送を中心に描きながら、私たちの毎日の生活を支えるための、国鉄の輸送業務と鮮魚列車で努力している人びとの姿を、一般の人たちに知らせようとするものです。(10、1～10、19)

つばめを動かす人たち　三巻

企画　日本国有鉄道
製作　日映科学映画製作所
　　加茂プロダクション
演出　関川秀雄
撮影　植松永吉
　　川村浩士
音楽　伊福部昭

この映画は、国鉄の運転業務を中心として、列車の運転を安全、正確、迅速にするための業務の実際の姿と、動力車を主とする国鉄最新の技術を紹介しようとするものです。

新しい運転技術を結集した「特急つばめ号」を主題として、品川機関区で行われる列車組成から東京駅出発、名古屋駅での機関車の取りかえ、大阪駅到着、更に宮原機関区の機関車整備までを、実際の運転状況を追いながら記録し、車輛の整備、機関車の操縦、乗務員の業務などを紹介しています。

演出の関川秀雄氏は、劇映画ばかりでなく、記録映画にも秀れた才能を示し、国鉄でつくつた前作「鉄路に生きる」は、一九五二年度に行われた第八回ベニス国際映画祭において記録映画部門の二等賞を得、フィルム・ライブラリーでも昨年一〇月にとり上げたことがあります。(10、10～二、七)

なお、「御馳走列車」及び「つばめを動かす人たち」は、日本国有鉄道の提供によるものです。

コルダー　Works of Calder

製作　ニューヨーク・フィル・プロダクション
提供　東京アメリカ文化センター
(一〇、一九～一〇、二四)

フィルム・ライブラリーでは、月例映写会のほかに毎水曜日二時から、古典的名画をとり上げて特別鑑賞会を開いておりますが、今回は「四人の画家」展の期間中、その第一二回として、初期のアメリカ映画から、チャプリン初の長篇映画「醜女の深情」を上映します。古典映画に特に興味をお持ちの方、研究されたい方は是非御利用下さい。